

## 2014 年度後期 学生授業評価アンケートの集計結果に対するコメント

—文芸学部—

文芸学部長 戸部 順一

昨年末に「後期授業評価アンケート」が実施された。その集計結果が公表されたので、一言、コメントを加えさせていただく。文芸学部に関する実施実績について触れるなら、実施必須科目数 225 件に対し 219 件においてアンケート調査が実施された。97 パーセントの実施率は決して低くなく「授業評価アンケート」は確実に定着した、と言えよう(実施任意科目については 76 パーセントの実施率であった)。さて、集計結果から授業の質あるいは受講生の熱意の向上を読み取るには「2013 年度【後期】授業評価アンケート集計結果」及び「2014 年度【前期】授業評価アンケート集計結果」で示された数値との比較を行う必要がある。2013 年度との比較の結果からは、12 の各設問への評価点が、この 2 年間ほとんど変化なく 4 点台半ばを維持しており、文芸学部の提供科目が受講生に歓迎されている状況にあるのが読み取れる(設問 12「総合的にこの授業を評価できる」は、2013 年度の平均値が 4.47、2014 年度の平均値は 4.46 であった)。少なくとも授業中での教員と受講生との関係は良好であり、それが設問 11 の「この分野の関心と学力が得られた」に対する評価点を押し上げているのだと分析できる。ただ、学力が得られるためには、教室外での自習が必須と思え、授業参加のためにどれほどの時間を予習に割いているのか、また授業についての関心が授業の進行とともに増していったのか、といった面に関するアンケートを取る必要性を感じた。設問 8「授業への教員の熱意を感じた」への評価平均点は 4.48 (2013 年度は 4.51) と高評価を得ているが、教員側の熱意によって「受講生の皆さんはやる気を起こしたのか」を是非とも知りたいところである。

前期と後期の集計結果の比較からは設問 6「この授業のレベルはあなたにとって適切であった」の平均評価点が 3.99 から 4.15 に上昇している点が目を引く。数値の上昇は受講生の学力をよく理解し、より分かりやすい仕方でも授業を展開していった教員の工夫のあらわれであり、受講生にしてみれば、授業への理解度が高まっていった結果の上昇であり、教員の授業運営が成功裡に進んでいたことの証として評価したい。

この数年の各設問に対する平均評価点はいずれの設問に関しても 4.5 前後の値を示している。教員諸氏には数値に現れた授業への好評価に慢心することなく、さらなる授業デザインへの努力をお願いしたいところである—まだ評価点を上げる余地は残っている。たとえ評価点が高止まりの状態にあるにせよ、アンケートを実施する意義が、我々のたゆまぬ努力への自覚を促すためのものであることを忘れないでいてもらいたい、と強く希望する次第である。